

こなとこに



1、富士山のように美しく自然を愛しきれいな環境をつくります

緑を守り育てる緑の少年団



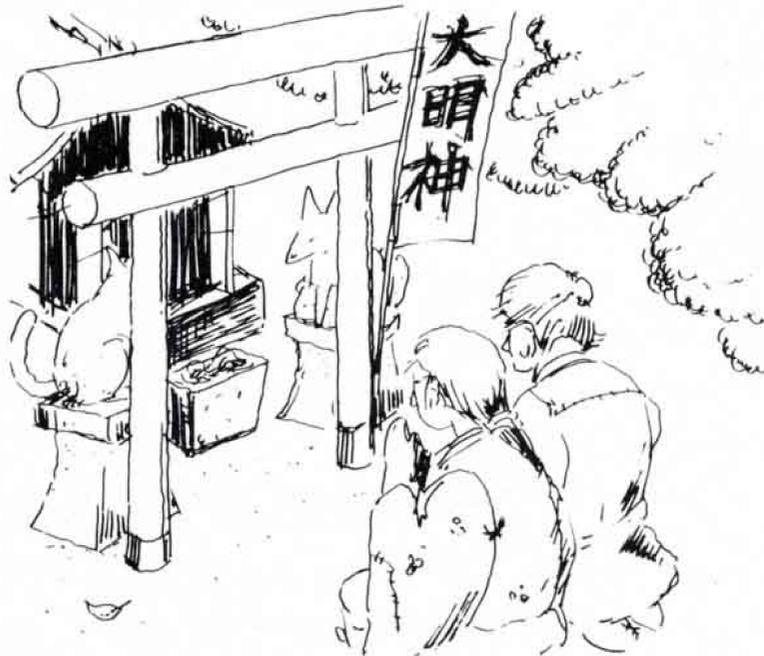
△植樹祭に参加(五月)

大淵第二小学校に「ふじもとみどりの少年団」が誕生したのは、昭和57年5月。大淵第二小の周辺は、自然が豊富に残されている地域ですから、美しい自然を大切に守り、よりよい郷土づくりの担い手を育てることを目的として、活動を行っています。

今年度は、学校教育と合わせて植物の育成や枝打ち作業、巣箱かけ、清掃奉仕作業、グリーンキャンプなどを行ってきました。2月下旬は探鳥会を予定しており、団員たちはいろいろな活動を通して、自然を愛する心を体で感じています。

みどりの少年団は、現在、今泉小学校にもできています。

ふるさとの昔話



初午

二月の初めての午の日を初午と言い、お稲荷さんの縁日です。ことしは二月十日に当たり、幾つかの稲荷神社でお祭りが行われます。今回は広見東本町の草間勝さん(七十二歳)にお稲荷さんのことを伺いました。

お稲荷さんは、招福・除災・財福の神として知られていますが、昔は開墾地の守り神として盛んに祭られていました。

苦難続きの開墾

産業といえは農業ぐらいしかなかつた昔々のことです。

私たちの先祖は穀類や野菜の生産を高めるために、農地の開墾に精を出していました。富士市は今でこそ豊かな土地ですが、昔は必ずしもそうではありませんでした。

市の北部は水がなく、畑につくられるものは限られていました。東部は、浮島沼が一面に広がってはいましたが、田んぼは逆潮の被害などに幾度となく遭い、満足に収穫できませんでした。そして、南部は高波、西部は富士川の洪水に見舞われ、開墾作業は自然との闘いでもありました。ましてや、昔は、今のようにはブルドーザーやトラックはありません

ん。人間が牛馬などを使って少しずつ切り開くしかなかったのです。ですから開墾地を守り、豊作を祈る稲荷さんが広まったのは、当然のことかもしれません。

農業の始まりの日

また、昔の人々の生活には千支が深くかかわっていましたので、農事暦は千支で決められることが通例でした。二月の初午は、本格的な春の農業の始まりの日と云うことができます。



▷草間勝さん

現在の初午は、「正一位稲荷大明神」と書かれたのぼりが立てられたりしますが、祭りそのものは、にぎやかな催しはあまり行われていません。お稲荷さんと言えば商売繁盛のイメージが強くなってきたのは、時代の流れでしょうか。

地名の由来

じま なるい かわ 川



△新富士駅の南側付近

明治二十二年(一八九)までは川成島村と呼んでいました。

この村も富士川の砂洲を開墾してできた村でしたから、富士川の洪水のたびに田畑を流されたので、川成村と呼んだのであろうという説があります。

一説には、洪水のとき川が音を立てて流れるので、川鳴と呼びましたが、いつか川成と書くようになったものだと伝えられます。

こちら編集室

六ページで紹介した竹田さんの取材のこと。久しぶりに、口こもってしまいました。話題は乳がんのことですから、当然女性の胸のことを尋ねなければなりません。胸・乳房・おっぱい等々表現はいろいろありますが、どれを使うべきか。結局、真摯な竹田さんの姿勢に引きずられ、自然に会話になっていました。竹田さん、失礼しました。